



昔むかし・・・～京都府の遺跡をよむ～

## 飛鳥・奈良時代の京都

はじめに

6世紀後半から8世紀初頭にかけて奈良県の飛鳥地方を中心に都が置られました。この時代を「飛鳥時代」と呼びます。飛鳥時代になってヤマト政権の統一によって、地方を支配した「豪族の時代」は終わりをづけました。

これまでの身分制度を官職と位階<sup>いかい</sup>を基本とするものに改め、進んだ政治のしくみや文化を学ぶために中国の隋や唐に使節を派遣しました。この頃から文字（漢字）の使用もはじまりますが、実際に使えたのは貴族・役人や僧侶のような限られた人々でした。また、古墳の築造は一部の有力者に許されたのみでほとんど造られなくなり、それにかわって寺院が建立されました。

694年、天武天皇の遺志を継いで、持統天皇の治世に本格的な都となる藤原京が造られ、710年には都が藤原京から平城京に移され、784年に長岡京、さらに10年後には平安京に遷都<sup>せんと</sup>します。飛鳥時代に続く奈良時代は、律令という中国式の法律によって中央集権的な国家建設が進められた時代です。

奈良時代は、東大寺の大仏造営を頂点として天平文化の華が開きましたが、きらびやかな貴族の生活と対照的に農民たちは度重なる争乱や重



寺院跡が見つかった馬場南遺跡

# 飛鳥・奈良時代の京都

い税の負担に苦しみました。

京都府は、律令時代に設定された山背<sup>やまし</sup>・丹波・丹後の三つの国から成り立っています。ここでは最近の発掘調査を中心に、それぞれの国毎に2つの時代の遺跡をながめて行こうと思います。

**山背国** この国名は、政権の中心地であった大和の北側に接することに由来し、奈良時代までは「山代・山背」の字が使われていましたが、平安時代以降は「山城」の字が用いられました。

山背国は、都と地方を結ぶ交通の要衝として重要視され、その中心に水運の大動脈である木津川があります。木津川は輪韓川<sup>わからがわ</sup>・泉川<sup>いづみがわ</sup>とも呼ばれており、平城京や大寺院の造営、日常の物資を運ぶために利用されました。現在の国道24号線の泉大橋の南たもとには木津川を利用した物資の陸揚げ場所である東大寺木屋所・大安寺木屋所などが設置されていたことが知られています。発掘調査でも、木津川市上津<sup>こうづ</sup>遺跡が港湾関係の遺跡「泉津」として理解されています。

聖武天皇は、740年に瓶原<sup>みかのほら</sup>（木津川市加茂町）の地に恭仁宮<sup>くきにきゅう</sup>を造営し、都が置かれます。恭仁宮は日本国の首都として、日本の中心となりますが、わずか3年余りで難波宮<sup>なにわのみや</sup>（大阪市）に遷ってしまいます。恭仁宮は短命の都であったため本格的な造営は行われなかつ



恭仁宮が営まれた木津川市加茂町（京都府教育委員会提供）

たと考えられてきましたが、近年の発掘調査で、他の宮都には見られない恭仁宮独自の構造が明らかになってきました。瓶原の地（恭仁宮）から難波宮に遷ったのち、恭仁宮の大極殿の建物を利用して山城国分寺が建てられました。

古代の役所の跡は、城

陽市<sup>しょうどう</sup>正<sup>かんが</sup>道官衛遺跡（久世郡衛跡）などがあるのですが、同市<sup>しばやま</sup>芝山遺跡でも官衛か<sup>うまや</sup>駅家と推定される大規模な建物跡が見つっています。

官道<sup>かんどう</sup>に沿う集落跡としては八幡市<sup>うちざとはつちよう</sup>内里八丁遺跡<sup>さんいんどう</sup>があります。古代の山陰道に沿って飛鳥から奈良時代の



官道沿いの集落（内里八丁遺跡）

建物が並び、出土した多数の銭貨は活発な経済活動を物語ります。また、精華町<sup>ひのくち</sup>樋ノ口遺跡は平城宮に近く奈良時代の離宮跡の可能性があり、同畑<sup>はたのまえ</sup>ノ前遺跡では豪族の居館跡が見つっています。

山城国内には、仏教の伝来とともにいち早く寺院が建てられます。飛鳥時代から奈良時代にかけて、南山城地域には40数か所の寺院が造営されました。近年、話題を集めた馬場南遺跡（神雄寺）も存在し、注目されます。南山城地域には荘厳な伽藍<sup>がらん</sup>が建ち並び、道行く人の目を奪ったことでしょう。

木津川市<sup>かまがだに</sup>釜ヶ谷遺跡は当時の水辺の祭りに係わる遺跡で、けがれを祓<sup>はら</sup>う墨書人面土器<sup>ぼくしょじんめんどき</sup>などの祭祀遺物が多数見つっています。

奈良県境の丘陵地には、平城京内で使用する大量の瓦を焼いた瓦窯が多数築<sup>しょうにんがひら</sup>かれました。木津川市上人ヶ平遺跡では整然と並ぶ大規模な瓦作りの作業所が見つかり、国直営の瓦工房の実態が明らかになりました。



釜ヶ谷遺跡の墨書人面土器

丹波国 古くは「たには」と呼ば



# 飛鳥・奈良時代の京都



丹波国府の可能性もある池尻遺跡

れ、713年に丹後国が分国されます。現在は旧五郡のうち二郡が兵庫県に含まれています。山背国から山陰道を通して日本海側の地域にいたる交通上の重要な位置をしめています。

丹波国府の所在地については諸説ありますが、近年、<sup>おおいがわ</sup>大堰川<sup>いけじり</sup>東岸部、亀岡市池尻遺跡で役所跡と思われる整然と配置された掘立柱建物跡群が見つかりました。<sup>ぐんが</sup>郡衙<sup>うまや(えき)</sup>や<sup>いけじり</sup>駅家説とともに国府跡の可能性もでてきました。

近くの池尻廃寺からは白鳳期の藤原宮式軒瓦が出土しており、中央との結びつきが窺えます。

奈良時代には、国分寺や国分尼寺（<sup>おしょうにんばやし</sup>御上人林廃寺）のほか、亀岡市内を中心に多くの寺院が建立されました。三日市遺跡では国分寺跡と同じ軒瓦が出土し、国分寺の造営に伴う瓦窯跡であることがわかりました。国分寺跡周辺では、<sup>くらがいち</sup>蔵垣内遺跡をはじめ飛鳥時代から奈良時代にかけての大規模な集落跡が見つかっており、寺や役所を中心に人々が集まる小さな都の景観を呈していたようです。

一方、丹波北部の由良川流域の飛鳥時代には、石積みの方形段をもつ終末期古墳である綾部市山尾古墳が築られました。同綾中廃寺では外周部に瓦を積み上げて壇状の高まり（<sup>あやなか</sup>瓦積基壇<sup>かわらづみきだん</sup>）をもつ施設が見つっています。奈良時代には、郡衙跡とされる綾部市青野南遺跡や郡寺の綾中廃寺（<sup>あやなか</sup>綾中廃寺<sup>あやべ</sup>）が見られ、<sup>あおのみなみ</sup>漢部氏<sup>あやべ</sup>など新しい渡来系氏族が移り住んだものと思われます。由良川の自然堤防上にある舞鶴市<sup>くわがいかみ</sup>桑飼上遺跡では、大規模な掘立柱建物跡群が見つかっており、由良

川の水運に関係する役所跡の可能性がります。

舞鶴市浦入遺跡では、海水を利用して塩を生産した奈良・平安時代の大規模な製塩炉跡群や大量の製塩土器が見つっています。ここで作られた塩も都へ送られたのでしょう。ここでは「笠」と刻印された製塩土器が出土しており、加佐郡衙の管轄下におかれた施設の可能性があります。



倭野廃寺で出土した軒丸瓦

丹後国 丹後国は丹波国の一部でしたが、和銅6（713）年に丹波国から分かれました。日本三景のひとつ天橋立を望む平野部に国府が置かれました。宮津市府中にある京都府立丹後郷土資料館の敷地内には中世以降に再建された丹後国分寺跡が残っています。

このほかに、飛鳥時代にさかのぼる寺院跡として京丹後市倭野廃寺があり、軒先を飾る軒丸瓦・軒平瓦や鬼瓦、塔の心礎と思われる礎石（そせき）が見つっています。軒丸瓦には、都風のものとは地元の工人が範を制作したと思われる蓮の花の模様を簡略化したものがあり、都を離れた土地での寺造りの苦労がうかがえます。

仏教の普及とともに火葬の習慣が地方にも広まります。京丹後市大宮町左坂横穴群（ささか）では、丘陵斜面に掘られた小さな横穴内に火葬骨が埋葬されていました。

京丹後市遠處遺跡（えんじょ）・黒部遺跡（くろべ）では、砂鉄を利用した奈良時代後半頃の大規模な製鉄遺構が見つっています。製鉄炉・鍛冶炉・炭焼窯・工房跡からなる古代の製鉄コンビナートで、丹後国だけでなく律令国家の管轄内で鉄の生産を考えるうえで重要な遺跡です。

（辻本和美）